



Title	西田幾多郎の自覚の哲学：知識論と行為論におけるその展開 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	猪ノ原, 次郎
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15990号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92367
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Jiro_Inohara_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 猪ノ原 次郎

学位論文題名

西田幾多郎の自覚の哲学

——知識論と行為論におけるその展開——

・本論文の観点と方法

本論文は、西田幾多郎の思索のほぼ全体を貫く問題の一つである「自覚」の概念に狙いを定め、西田哲学全体の核となる思想を「自覚」の観点から考究したものである。「自覚」概念の重要性は、すでにこれまでの研究史の中でも十分に認識され、研究が行われてきたが、「自覚とは何か」の根本的理解において、諸研究は一致を見ていない。本研究は、西田にとって「自覚」が単に哲学の重要テーマの一つであるというより、哲学そのものを成り立たせる基底的なものであったという観点から、「場所」「絶対無」「行為的直観」などの独自の概念を通じて西田が開いた思考空間の特異性そのものに迫ろうとしている。その際、近年盛んに論じられつつあるいわゆる分析的ドイツ観念論（analytic German Idealism）と呼ばれる潮流を取り上げ、同じくドイツ観念論の思考圏から出発して思索を展開している西田の自覚概念を論理的に究明するための手がかりとしている点が、本研究の方法的独自性として挙げられる。かくして本論文は、自覚・自己意識の根本的な論理的構造が、哲学的思考一般を成り立たせる根本的な前提を成していること、西田哲学がそのような思考そのものの核心に迫ろうとしていた点を明らかにしようとしている。

・本論文の内容

本論文は序文と5つの章、および結論からなる。

第一章では、西田にとって自覚とは何か、それがいかに哲学そのもののあり方と重なるかが究明される。そこでは、自覚が一つの状態・作用・活動ではなく、むしろ思考の形式かつ存在の形式であることが西田のテキストに即して示される。西田にとって自覚は、哲学の方法と原理であるという意味で哲学の基底をなす。哲学とは、自覚、すなわち「私」の活動の自己理解の分析であり、同時に、真実でない「世界」の知識である。この二つの哲学の規定が、いかにして一つに重なるのか。そもそも哲学者は、心と世界の関係の傍らから眺める理論家の位置に立ちうるわけではない（「対象論理」の批判）。西田は、「世界が自覚する時、我々の自己が自覚する」と言う。自覚とは、世界内の或る特別な対象（すなわち一つの自己）についての理解なのではなく、何らかの意味で限界なき一般的理解、すなわち「世界の理解」である。私の自己理解の内には世界は存在せず、私の自己理解＝自覚とは、そのまま「世界」という普遍的なものの理解にほかならないのである。

第二章では、初期から中期（『善の研究』から論文「場所」の前後まで）の西田における「自覚」概念の形成を跡づけている。そこでは、西田が新カント派をはじめとする同時代の認識論をどのように把握していたかを論じ、西田が同時代の認識論に対する応答として自らの「自覚」概念を形成してゆく経緯とその理路が描き出されている。本論文の主張によれば、西田が「自覚」概念を形成する際のポイントは、自己意識と自己実現との対比といったところではなく、認識論の或る基本想定に対する批判的な論点にある。その基本想定とは、「作用-対象の区別」と呼ばれるべきものであり、また、「まず認識主体と客体を措定し、その間の関係として認識作用を考える」という認識論のアプローチである。これに対し、西田が「思惟が思惟を思惟する」と表現する「自覚」は、時間上の出来事ではなく、ある意味で超時間的であり超個人的であるという言うべきである。こうした思索を経て、西田は「自覚」を意識作用の形式ないし構造として明確に理解するようになる。その後西田は、「主語-述語」という論理のカテゴリーを用いた思考へとシフトする。

第三章では、哲学史的方法から内在的解釈にシフトする。西田は、「自己が自己に於て自己を見る」という定式を用いて自覚を表現した。この思想を解きほぐすために、本章では自己意識の二つの

用法が区別される。第一に、自己意識とは、「自己」という特別な対象を意識することである、とする理解がある。これを自己意識のO用法と呼ぶ(OはobjectのO)。本論文の解釈によれば、西田のいう自覚はこのO用法の自己意識ではない。もう一つ別の理解によれば、意識を自己意識たらしめるのは、その対象ではなく様式である。「自己意識とは、それについての意識であるところのものに内在する意識である」というのがその様式である。内在性(internality)の頭文字をとって、これを自己意識のI用法と呼ぶ。自己意識は、pという判断に付け加わるのではなく、pという判断そのものの内在的構造である。本論文はそれを、「pと判断することのうちで、私は私自身がpと判断していると意識している」と表現している。

第四章は、第三章で得られた自覚の基本構造の理解を前提に、西田の知識論の解明に注力する。その際、筆者が「おそらく現存する哲学者の中で最も西田に近いかたちでドイツ観念論の「自己意識」の思想を継承している」と評価する Sebastian Rödl の知識解釈が随所で参照されている。焦点となるのは、「徹底的批評主義」と「絶対無の自覚」である。「徹底的批評主義」とは、世界についての知識と知識の自己理解(哲学)とがまさしく重なるということを追究していく考え方であり、何事かを知ることのうちで常にすでにわれわれが理解してしまっているような、知識の〈何であるか〉、知識の自己知を解明することである。自己知とは、それなしでも成り立つ知識にさらに付け加わるものではなく、知識そのものの根本形式を意味している。さらに本論文は、西田の語る「無」を「最大限の一般性」とする解釈と「創造的無底」とする解釈を斥け、「論理的・判断論的」な解釈方法を採用。「無の一般者」は、何ものをも何ものからも区別しない。この点で「有の一般者」とは根本的に異なる。この絶対的な他性ゆえに、有と無は互いに排除し合うことはない。無の場所とは、「あらゆる述語的区別がそこでなされる場所」である。別言すれば、それは「世界」にはかならない。それは、哲学の「対象なき対象」の限界なき一般性を意味している。あらゆる判断の真の主語は、「世界」なのである。

第五章では、やはり第三章の「自覚」解釈を前提として、「行為」論に踏み込む。Aを為すこととそれを意識することは別個の作用ではない。行為は、「Aを為しているとき、私は私自身がAを為していると理解している」という自覚の構造をもつ。行為は本質的に目的論的構造をもつ。西田が「見ることによって働く」と表現する「行為的直観」の構造は、「いかにして或ることを為すか」という私の実践的知識が、「私が現にそれを為していること」の源泉である、という仕方で理解できる。かくして行為と実践的自覚の個別性のうちに一般性が浸透しており、知識の一般性のうちに個別性が浸透している。さらに、行為は制作的である。作られたものは作るものを離れて、公共のもの、世界においてあるものとなる。そこにおいて、知識は身体化・個別化されねばならない。身体は知識の形式そのものであり、身体は諸個物との直面を通じて人間を世界へと開く。身体的行為の個別性(規定性)のうちには一般性が浸透しており、一般性のうちには個別性が浸透している。かくして「自覚」は、「世界が世界自身を形成する」ことでもあると言っているのである。